

## 『うつほ物語』 俊蔭女の尚侍就任と

### 王昭君説話・長恨歌・竹取物語

山口 一樹

はじめに

『うつほ物語』内侍のかみ巻にて、俊蔭女は、帝の御前での弾琴の功により、尚侍に任ぜられることとなる。以下引用するのは、尚侍就任直後の朱雀帝の発話であるが、俊蔭女が尚侍となつて、後宮内の格別の立場に置かれたことがよくあらわれている。

「昔よりかやうならましかば、今は、国母と聞こえてましかし。わいても、仲忠の朝臣ばかりの親王なからましかし。よし、行く末までも、私の后におもはむかし。時々、なほ参り給へ。御息所は、願ひに従ひて、清涼殿をも譲り聞こえむ。みづからは屋陰に住むとも、御願ひの所はものせむ。」  
(内侍のかみ、四三六頁)

朱雀帝は、俊蔭女について、本来「国母」になり得た存在であると言ひ、尚侍となつた今は、行く末までも「私の后」として思おうと述べる。俊蔭女の曹司は、望みどおりの場所を用意するとして、清涼殿まで譲ろうと述べている。この俊蔭女の尚侍就任は、俊蔭巻以来の琴の一族の物語が、一つの終着点に至つたことを意味するものと考えられてきた。高橋亨氏は、朱雀帝の発話における「反実仮想による「国母」」は、「天の掟あらば、国母・夫人ともなれ。掟なくは、山賤、民の子ともなれ」(俊蔭、二三頁)という俊蔭の予言を想起させていると説く。尚侍となつた俊蔭女の立場は、「現実の后や帝さえも超えたものだ」とされている<sup>(1)</sup>として、俊蔭の予言の内容が「半ば実現した」形であると論じた。

一方、俊蔭女の尚侍就任は、のちの物語を新たに導き出すものとも考えられている。猪川優子氏は、俊蔭女が尚侍となり「後宮における強大な力」を得たことを確認しながらも「兼雅妻・仲忠母という家の立場」も失っていないことに注目する。そして、俊蔭女の彈琴と尚侍就任により、琴の一族の存在価値が保証されることで、次巻沖つ白波巻における仲忠の女一宮降嫁が実現すると論じた。また、尚侍に就任した俊蔭女は、将来のいぬ宮入内に向けて、政治的な後ろ盾としての役割も担うと説く。

以上のように、琴の一族の物語において、俊蔭女の尚侍就任がもつ意義は大きい。それは、俊蔭の遺言に端を発する俊蔭巻以来の物語と、政治的な地盤を固めながら秘琴伝授に至る沖つ白波巻以後の物語との双方に、密接にかかわって語られた事態であった。

本稿は、この俊蔭女の尚侍就任を実現させる物語展開の方法について、検討するものである。そのうえで、内侍のかみ巻に認められる複数の引用に注目する。俊蔭女が尚侍に就任する過程では、王昭君説話・「長恨歌」・『竹取物語』が次々と引用されている。これらの引用については、先行研究でも、個別の対象に即して検討が重ねられてきた。本稿では、先行研究の成果を引き受け、各引用の特徴に検討

を加えながらも、より包括的な視点から考察をおこなう。すなわち、内侍のかみ巻に複数の引用が認められることは、尚侍に就任した俊蔭女のあり方とどのように関わっているのか、という課題に取り組みたい。尚侍となった俊蔭女は、立場上女官でありながらも、帝からは后として扱われ、他后にも優る手厚い待遇を受けている。そのような女官の域を超え、他后をも圧倒する尚侍の造型を、物語は、重層的な引用により帝の寵愛の重さを表現することで、成立させているのではなからうか。複数の引用の効果に注目することを通して、俊蔭女の尚侍像を実現させる物語の展開方法について考察する。

## (一) 王昭君説話引用

内侍のかみ巻の王昭君説話・「長恨歌」・『竹取物語』引用は、いずれも朱雀帝の発話のなかで行われている。まず、王昭君説話引用について検討したい。

中国において王昭君説話は、『漢書』『後漢書』の史伝にはじまり、脚色が加えられながら、楽府や詩など様々な形に派生していった。<sup>③</sup> 本朝においても、『懷風藻』をはじめ、漢詩文や物語、和歌など多方面に受容の跡がみられるが、『うつほ物語』は、王昭君説話を和語で叙述した最も早い

例とされる。内侍のかみ巻において、朱雀帝は、俊蔭女の演奏した「胡笳の声」に感動し、胡人の妻となった唐の后の哀話を語る。この説話について、上原作和氏は、前半部が『西京雜記』『世說新語』など散文の王昭君説話により、後半部が『文選』所収「王昭君詞並序」から派生した韻文によるものであると指摘した<sup>(4)</sup>。

本稿では、とくに説話前半部、散文の王昭君説話と関連する箇所焦點をあてる。前半部については、岡崎真紀子氏が、説話中の王昭君が「並びない帝の寵愛を一身に受ける后」とされる点など、朱雀帝が俊蔭女に思慕を語る展開に即して、説話の内容が改変されていることを指摘している<sup>(5)</sup>。ただし、王昭君を寵妃とする認識は、『うつほ物語』成立前の漢詩文にもみられる。内侍のかみ巻の王昭君説話引用は、先行する日本漢詩にみられる王昭君像を踏襲する形で、おこなわれているのではなからうか。以下、『西京雜記』の王昭君説話を確認したのち、勅撰漢詩集所収の王昭君詩を取り上げ、内侍のかみ巻の説話引用の特徴について検討を加えたい。

まず、『西京雜記』では、元帝が王昭君と対面したのは、匈奴の後となることが決まった後のこととされている。

元帝後宮既多、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>常見<sub>一</sub>。乃使<sub>二</sub>画工<sub>一</sub>図<sub>レ</sub>形、案<sub>レ</sub>

図召幸之。諸宮人皆賂<sub>二</sub>画工<sub>一</sub>。多者十萬、少者亦不<sub>レ</sub>減<sub>二</sub>五萬<sub>一</sub>。独王嬙不<sub>レ</sub>肯。遂不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見。匈奴入朝、求<sub>二</sub>美人<sub>一</sub>為<sub>二</sub>關氏<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是上案<sub>レ</sub>図、以<sub>二</sub>昭君<sub>一</sub>行。及<sub>レ</sub>去召見、貌為<sub>二</sub>後宮第一<sub>一</sub>。善<sub>二</sub>應對<sub>一</sub>、举止閑雅。帝悔<sub>レ</sub>之。

(元帝の後宮既に多く、常見するを得ず。乃ち画工をして形を図<sub>か</sub>かしめ、図を案じて召幸す。諸の宮人、皆画工に賂<sub>ま</sub>う。多き者は十萬、少なき者も亦五萬を減ぜず。独り王嬙のみ肯<sub>が</sub>ず。遂に見ゆるを得ず。匈奴入朝す、美人を求め關氏に為さんとす。是に於いて上図を案じ、昭君を以て行かしむ。去るに及びて召見するに、貌後宮第一為り。應對を善くし、举止閑雅なり。帝之を悔む。)

元帝は、画工に書かせた絵をもとに、宮女を召し出すこととする。他の宮女と異なり、王昭君は画工に賂路を贈らなかつたために、元帝の目に留まることなく、匈奴に后として差し出されてしまう。去り際、元帝は、王昭君の美しい容姿や氣立ての良さを知って、胡国へ遣わすことを悔いたという。

一方、勅撰漢詩集所収詩のなかには、王昭君について、帝から寵愛を寄せられていたとするものが見いだせる。『文華秀麗集』所収の嵯峨天皇周辺における応制奉和詩五首で

は、藤原是雄が「含<sup>レ</sup>悲向<sup>二</sup>胡塞<sup>一</sup>」。辞<sup>レ</sup>寵別<sup>二</sup>長安<sup>一</sup>」（悲を含みて胡塞に向かひ、寵を辞<sup>りて</sup>長安に別る）と、胡国に向かう王昭君の悲しみを詠むなかで、王昭君は、帝の寵愛を辞退し長安で別れたとしている（巻上・楽府・「奉和王昭君一首」）。似た表現は『経国集』にもみえ、小野末嗣が「一朝辞<sup>レ</sup>寵長沙陌。萬里愁聞行路難」（一朝寵を辞す長沙の陌、萬里愁へ聞く行路の難）と、長安を去る王昭君の悲しみを、帝の寵愛を辞退することから詠んでいる（巻第十四・詩十三・「七言。奉試。賦得王昭君。一首<sup>六韻</sup>為限」）。

以上のような、王昭君は寵妃であつたとする認識を、内侍のかみ巻は踏襲しているように思われる。朱雀帝が語つた唐土の後の哀話を取り上げる。

「昔、唐土の帝の戦に負け給ひぬべかりける時、胡の国の人ありて、その戦を静めたりける時、天皇、喜びの極まりなきによりて、七の后の中に、願ひ申さむと仰せられて、七人の后を絵に描かせ給ひて、胡の国の人を選ばせたまひける中に、すぐれたるかたちありける、その内に、天皇思ふこと盛りなりければ、その身の愛を頼みて、こくばくの国母・夫人の中に、我一人こそは、すぐれたる徳あれ。さりとて、我を武士に賜ばむやはの頼みに、かたち描き並ぶる絵師に、六人

の国母は千両の黄金を贈る、すぐれたる国母は、おのが徳のあるを頼みて贈らざりければ、劣れる六人は、いとよく描き落として、すぐれたる一人をば、いよいよ描きまして、かの胡の国の武士に見するに、この一人の国母をと申す時に、」（内侍のかみ、四二八―九頁）

朱雀帝が語る唐土の后と帝は、王昭君説話における王昭君と元帝に相当する。ここでは、「天皇思ふこと盛りなりければ」とあるとおり、帝の后に対する寵愛は、かねてより深かつたとされている。帝の愛情に対する后の信頼も、「その身の愛を頼みて」「我を武士に賜ばむやはの頼みに」「おのが徳のあるを頼みて」と繰り返される。后は、帝の愛情を頼つて絵師に賄賂を贈らなかつたために、胡人から見染められてしまう。『西京雜記』にみえる王昭君説話の大枠をなぞりながらも、王昭君は寵妃であつたとする認識を踏まえた形に、説話の筋が書き換えられていると考えられる。

なお、『西京雜記』と内侍のかみ巻の間には、后の人数や帝が絵を描かせた経緯にも相違が見いだせる。帝が画工に絵を描かせた経緯について、『西京雜記』では、後宮に多くの女性たちが迎えられており、帝が把握できなかつたためとされている。一方、内侍のかみ巻では、后の人数は七人とされている。<sup>(6)</sup>帝が絵を描かせたのも、戦果により胡人に

后を与えようとしたことがきつかけとされている。帝の后に対する寵愛をもとより深かったとするのに応じて、他后の人数は多いものとされず、絵を描かせた経緯にも改変が加わったものと考えられる。

内侍のかみ巻における説話引用の特徴は、王昭君が帝から深い寵愛を受けたとされるなか、両者の関係性が俊蔭女と朱雀帝に擬えられてゆく点にある。

「境越えけむ国母に、関入らぬ国王をこそ思しも落とさざらめ」。北の方の、「いかなる関守りかは許し聞こえさせざらむ」。上、「近き衛りの陣こそは、固く居ためれ」などのたまふ。

（内侍のかみ、四三〇頁）

朱雀帝は、「境越えけむ国母」の悲しみにも「関入らぬ国王」の悲しみは劣らないと述べ、俊蔭女に共感を求めている。寵愛深い后を手放した帝に自身を重ねながら、右近衛大将兼雅の妻となった俊蔭女に、かねてより寄せていた想いを訴えるのである。また、「国母」とされる王昭君に、俊蔭女が擬えられている点は、はじめに引用した、俊蔭女は本来「国母」になるべき存在であったとする発言を導く前提にもなっていると考えられる。

以上のように、物語は、先行する日本漢詩の王昭君像を踏襲する形で、王昭君説話を叙述し、朱雀帝の愛情の告白

を導いているといえる。

この内侍のかみ巻における王昭君説話引用は、これまで『源氏物語』の先行文学引用の方法より劣るものと考えられてきた。<sup>7)</sup> たしかに、先行文学の発想を柔軟に取り入れ、物語を織りなしてゆく『源氏物語』に比べれば、内侍のかみ巻の王昭君説話引用は、直接的であり、未発達な点もあるといえる。しかし、内侍のかみ巻の物語は、王昭君説話にとどまらず、「長恨歌」や『竹取物語』も朱雀帝の発話に引用してゆく。先行する説話や漢詩、物語を貪婪に取り入れ、朱雀帝の愛情の重さを表現してゆく点こそ、内侍のかみ巻の方法として注目すべきではなからうか。続いて「長恨歌」引用に目を移したい。

## （二）「長恨歌」引用

王昭君説話同様、白居易の「長恨歌」（『白氏文集』卷十二（0556））も、本朝の文芸に広く受容された作品である。<sup>8)</sup> 内侍のかみ巻では、俊蔭女を尚侍に就けたのちの朱雀帝の発話に「長恨歌」引用がみられる。この「長恨歌」引用に関して、江戸英雄氏は、「長恨歌」の世界が取り込まれるなかで、「後宮の人間関係は物語の後景へ退いている」と指摘する。そして、内侍のかみ巻の「長恨歌」によって現実的な人間

關係を捨象して帝の愛を描く方法は、国譲下巻における「長恨歌」世界の「負の側面を突いた」引用とともに、『源氏物語』桐壺巻の先蹤になつてゐると論じた。

江戸氏の指摘する、内侍のかみ巻の「長恨歌」引用の態度は、先の王昭君説話引用の場合と同様に、それ以前の享受のあり方と共通するものであるように思われる。以下、『うつほ物語』以前の享受の例として、「長恨歌」を踏まえて詠まれた和歌を取り上げ、『源氏物語』の「長恨歌」引用にも触れながら、内侍のかみ巻における引用の性格について検討する。

まず、著名な『伊勢集』の長恨歌屏風歌では、帝の寵愛の様子を詠んだものに、「たますだれあくも知らでねしものを夢にも見じとゆめおもひきや」(五五)が挙げられる。上の句は、「長恨歌」にて、楊貴妃に耽溺し政務を怠るまでになった玄宗の様子をうたう「春宵苦短日高起 従此君王不早朝」(春宵短きに苦しみ日高くして起き、此より君王早く朝せず)を踏まえ、下の句は、楊貴妃亡き後、夢にすら会うことのできない悲しみをうたう「悠々生死別経年 魂魄不<sub>レ</sub>曾来入<sub>レ</sub>夢」(悠々たる生死別れて年を経たり、魂魄曾て来りて夢に入らず)を踏まえたものである。「ゆめ」の同音反復を用いながら、かつて楊貴妃と共寝したところに

は、夢にも見なくなるとは思わなかったと、玄宗に成り代わって詠んでいる。生前の楊貴妃に対する寵愛は、世の乱れを引き起こしたものとではなく、死後の哀惜をかきたてるものとして詠まれているといえる。また、『源道済集』の長恨歌詠十首には、「寵愛一身」を句題とする「もしきの君が朝寝の移り香はしみにけらしな妹が狭衣」(二四三)が見いだせる。句題は「長恨歌」にて、玄宗の寵愛を独占する楊貴妃をうたった「三千寵愛在一身」(三千の寵愛一身に在り)に拠るものであるが、歌中にて「朝寝」が詠まれるのは、先の『伊勢集』歌同様、「春宵苦短日高起 従此君王不早朝」を意識したものと考えられる。ここでは、玄宗の寵愛ぶりについて、その移り香が楊貴妃の衣服にしみこむほどであったと詠まれている。寵愛が引き起こした世の乱れよりも、寵愛の大きさそのものに関心を寄せていることが伺える。

これらの「長恨歌」享受の例と同様に、内侍のかみ巻の「長恨歌」引用においても、玄宗と楊貴妃の深く結びついた關係のみが取り入れられている。

「草とならば、虫の声にても聞き、山とならば、風の音にても聞き、海・川とならば、波高き音にてもなむ聞かむ」とのたまふ。「楊貴妃が、七月七日、長生殿



にて聞こえ契りければ、おもとは、今宵、仁寿殿にてを契り聞こえむ。さらに、長生殿の長き人の契りに思ほし落とすな」と、世の中のあはれなることをのたまひて、

(内侍のかみ、四三三頁)

朱雀帝は、俊蔭女が草木や山川に姿を変えたとしても、虫や風、波の音を琴の音として聞こうと言う。これは、「長恨歌」にて、玄宗と楊貴妃が七月七日長生殿にて語りあつた言葉とされる「在天願作比翼鳥」在「地願為連理枝」(天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らん)を踏まえた言い回しである。朱雀帝は、当座の仁寿殿での契りを長生殿の契りに擬えながら、俊蔭女への想いを玄宗の楊貴妃に対する想いにも劣らないものと訴えている。

一方、『源氏物語』桐壺巻では、「長恨歌」引用がおこなわれるなか、帝の更衣に対する寵愛ぶりに批判の目が向けられている。

人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。

(桐壺①一七頁)

『紫明抄』以来指摘されるとおり、「上達部、上人なども

あいなく目を側めつつ」は、陳鴻「長恨歌伝」の「京師長吏、為<sup>レ</sup>之側目」(京師の長吏は、之が為に目を側つ)に拠る表現と考えられる。この一節は、玄宗の寵愛を背景とする、楊氏一族の専横への批判を記したものである。「長恨歌伝」の表現を踏まえながら、桐壺帝の寵愛は、世の乱れを招くものとして語られている。そのなかで桐壺更衣は、他后妃からの恨みを負い、死に至るのであった。内侍のかみ巻と同様に、桐壺巻にも「長恨歌」の比翼連理の契りを踏まえた場面はみられ、桐壺更衣の死後、桐壺帝は「朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき」(桐壺①三五頁)と、更衣の死を悼んでいる。新聞一美氏によれば、「長恨歌」は、『白氏文集』中にて直前に配置される「長恨歌伝」を通して読めば、諷諭詩としても読み得る作品であるという<sup>⑩</sup>。桐壺巻では、「長恨歌」の感傷詩としての側面と、「長恨歌伝」に色濃くあらわれる諷諭詩の側面の両面が受容されているのであった。

内侍のかみ巻の「長恨歌」引用では、「長恨歌伝」にあらわれるような諷諭の精神までは掬い上げられていない。そのあり方は、『うつほ物語』成立以前の「長恨歌」享受の態度と共通し、『源氏物語』との関係では、前段階的な様相で

あるといえる。

ただし、内侍のかみ巻の「長恨歌」引用において、玄宗と楊貴妃の深く結ばれた関係性のみが取り入れられていることは、俊蔭女が、深い帝寵を背景に、破格の待遇を受ける展開と、表裏する事態であったと考えられる。

はじめに触れたとおり、朱雀帝は、「御息所は、願ひに従ひて、清涼殿をも譲り聞こえむ」と、尚侍となった俊蔭女に清涼殿まで譲ろうと言う。尚侍には、宮中の曹司として、通常は後宮殿舎が与えられていたと考えられる。史上の尚侍では、藤原満子が梨壺や藤壺に居住していたことが確認でき、後代の例ではあるが、『源氏物語』の尚侍臘月夜も「弘徽殿」(賢木②一〇一頁)、玉鬘は「承香殿の東面」(真木柱③三八一頁)に住んでいる。実際に朱雀帝が清涼殿を譲渡することはあり得ないだろうが、いかなる形でも俊蔭女の望みを叶えようという発言からは、他后を超えた待遇で俊蔭女をもてなそうとする姿勢が伺える。

ここで注目されるのは、朱雀帝が「さて候はるとも、人、悪しとはものせじを」(内侍のかみ、四三六頁)と、俊蔭女が望むとおりの処遇をしたとしても、人から咎められるようなことはあるまい、と述べている点である。実際、俊蔭女への厚遇に批判の目は向けられていない。朱雀帝は、俊

蔭女に与える贈物を左大臣源季明に準備させてもいるが、季明は帝の指示に従い、仁寿殿女御や后の宮も「いかでか、いさかなりともものせむ」(内侍のかみ、四三六頁)と、同調している。巻末尾では、俊蔭女に贈られた盛大な品々の様子が書き連ねられてゆく。

内侍のかみ巻の世界では、朱雀帝の俊蔭女への寵愛ぶりに対し、非難や嫉妬は生じない。そのなかで、俊蔭女が、帝からの厚遇を受ける様子が描き出されている。「長恨歌」から諷諭の精神が掬い上げられていないことは、これらと表裏する事態であったと考えられる。

### (二) 重層的な引用と朱雀帝の寵愛

内侍のかみ巻では、王昭君説話・「長恨歌」に加えて、『竹取物語』の引用もみられる。三上満氏は、内侍のかみ巻の『竹取物語』引用について、仲忠母の琴による奇瑞が起きないうちに巻が閉じられてしまうことなどから、「仲忠母が霊琴を手にして天上界と交感するには、楼の上巻上巻の結末の場面までまたなければならぬ」と説く<sup>(12)</sup>。本稿では、楼の上巻の物語との関係は一端留保し、王昭君説話・「長恨歌」引用と同様に、『竹取物語』引用も朱雀帝の愛情の告白を導いている点に注目したい。



尚侍就任後、宮中から退出する俊蔭女に、朱雀帝は、八月十五夜の再会を約束する。

「十五夜に、必ず御迎へをせむ。この調べを、かかる言の違はぬほどに、必ず、十五夜にと思ほしたれ」。

尚侍、「それは、かぐや姫こそ候ふべかなれ」。上、「ここには、玉の枝贈りて候はむかし」。尚侍、「子安貝は、近く候はむかし」。

(内侍のかみ、四三七頁)

八月十五夜に迎えに行こうと誓う朱雀帝に、俊蔭女は、かぐや姫の昇天のようだという。それに対し、朱雀帝は、自身に重なるイメージを、月の使者からかぐや姫の求婚者に転換してゆく。『竹取物語』において、かぐや姫から蓬萊の玉の枝を求められたのは、くらしの親王である。朱雀帝は、自身を求婚者の一人に擬えることで、女君への愛情を訴えるのである。諸注指摘するとおり、俊蔭女の述べる「子安貝」は、皇子女を多く生んだ仁寿殿女御を暗示させていると考えられる。俊蔭女は、寵愛深い他后妃の存在をあてこずることで、帝の求愛を切り返している。

以上のように、物語は、先行する説話や漢詩、物語に登場する男性像を、次々と朱雀帝に重ね合わせてゆく。これらの引用は、いずれも直接的ではある。しかし、先行する男君のイメージを朱雀帝のうえに累積させることで、俊蔭

女に対する愛情の重さを表し得ていると考えられる。

これら複数の引用と並行して、俊蔭女に寄せる朱雀帝の想いを、何にも譬えようがない、とする叙述も繰り返されている。

一「心ざし、昔より、さらに譬ふる物なく多かれば、なほ、さて思ひてあれど、今、はた、なほ、さてのみは、えあるまじきを。」

(内侍のかみ、四三七頁)

二 上、御覧するに、譬ふべき人なく、めでたく御覧すること限りなし。かくて、いらへ給ふ、「年ごろの心ざしは、これにこそ見ゆれ。」

(内侍のかみ、四三八頁)

本文一は、先の『竹取物語』引用がみられた対話に先立つ、朱雀帝の発話である。朱雀帝は、俊蔭女への愛情について、かねてより譬えようのないほど重く、現在は過往にもまさっているのだと言う。本文二は、続く螢の光で俊蔭女の姿を見る場面である。ここでは、朱雀帝が螢の光に照らされた俊蔭女を見て、譬えようがないと思う心情を、語り手が捉えている。俊蔭女に魅せられた朱雀帝の心情の譬えようのなさが、状況と視点をかえて確認されているといえる。

複数の引用を介しながら、朱雀帝の愛情は、類を見ないほど強いものとされる。朱雀帝の愛情に擬えられる男性像

が一つに収斂せず、転換し続けてゆくこと自体、その想いが何によっても譬えきれないことの証左であるといえようか。

#### (四) 后扱いを受ける尚侍

異例の帝寵を背景に、俊蔭女の尚侍就任は実現してゆく。尚侍となった俊蔭女の立場は、どのようなものとして語られていたのだろうか。

はじめに触れたとおり、高橋亨氏や猪川優子氏の論考では、俊蔭女の立場は、他后を超越したものと考えられている。とくに朱雀帝が俊蔭女を「私の后」と言う点や、清涼殿まで譲ろうと述べている点が注目されてきた。一方、加納重文氏は、俊蔭女の立場について、女官の立場に留まると捉えている。尚侍就任の場面に「女官、皆驚きて、にはかに、内教坊よりも、いづくよりもいづくよりも、髪上げ、装束してふさに出て来て」(内侍のかみ、四三四頁)とあることから、「女官組織の統率的立場」が形式的に存在していることを指摘し、俊蔭女の立場は、「令制に規定する通り、女官組織を統括する最上級女官」であるとした<sup>(13)</sup>。

ここでは、尚侍となった俊蔭女の立場について、物語本文をたどりながら再検討したい。俊蔭女が女官の立場にあ

ることを示す叙述は、加納氏が指摘する他にも見出せる。一方で、朱雀帝が、俊蔭女を后として扱う姿も散見される。俊蔭女の立場は、朱雀帝との関係において、女官の領分から逸脱したものになっているのではなからうか。以下、朱雀帝が、尚侍任命を俊蔭女に伝える場面を取り上げる。

「涼・仲忠は、さてあり、おもとは、みづからをや  
は得給はぬ。中将の朝臣、紀伊国の祿には、娘をこそ  
は得たれ」とて、御前なる日給の簡に、尚侍になすよ  
し書かせ給ひて、

(内侍のかみ、四三〇頁)

「涼・仲忠は、さてあり」とは、吹上行幸での弾琴の功により、涼と仲忠にさま宮とあて宮を与えるとした宣旨を指す。あて宮が東宮に参入してしまったことから、仲忠には女一宮の降嫁が予定されていることも伺える。注目されるのは、そのような結婚に類する事態として、俊蔭女の尚侍就任が言及されている点である。朱雀帝の「おもとは、みづからをやは得給はぬ」という言葉は、涼がさま宮を、仲忠があて宮を、あるいは女一宮を妻とするように、俊蔭女が帝の后になるかのような言い回しであるといえる。

一方、本場面において朱雀帝は、「御前なる日給の簡」に俊蔭女を尚侍とする旨を書かせてもいる。この「御前なる日給の簡」は、女官の出仕勤怠を記録する女房簡であると

考えられる。<sup>(14)</sup>後代の書ではあるが、『禁秘抄』上巻「台盤所」には「東椅子其南女房簡」とあり、女房簡は、清涼殿の台盤所、御椅子の南に置かれていたと推測できる。物語では、朱雀帝が「人々、これに名して下されよ」（内侍のかみ、四三〇頁）と、左大臣以下の公卿たちに署名させる姿もみられる。<sup>(15)</sup>これらの叙述は、朱雀帝が俊蔭女を女官として任用したことを表わしている。

すなわち、朱雀帝は、客観的には、俊蔭女を女官として後宮に迎えていながらも、女君との関係においては、后として扱おうとしているのである。朱雀帝は、尚侍となった俊蔭女を「私の后」として思おうと述べる。「私の」后とするのは、俊蔭女が女官として尚侍に就任しており、公的な宣下を受けて補せられる女御などとは異なる立場にあるためと考えられる。俊蔭女は、すでに兼雅を夫としているため、正式な后にはなり得ないのである。しかし、私的な関係であるとしながらも、朱雀帝が俊蔭女を「后」として扱おうとしていることも確認できる。

以上のように、尚侍となった俊蔭女は、女官でありながらも、帝からは、后として扱われることとなる。また先に触れたとおり、帝から清涼殿をも譲ろうと述べられるなど、他后に優る処遇が約束されており、実際に多数の贈物が帝

主導のもと準備されてもいる。尚侍に就いた俊蔭女は、帝との関係において女官の域を逸脱し、他后を圧倒する立場にあるといえる。そして、このような俊蔭女の立場は、当然のことながら、朱雀帝の深い寵愛があつてこそ実現するものである。尚侍就任前後にみられる重層的な引用は、朱雀帝の寵愛の重さを表現することで、俊蔭女が女官でありながら他后を超えた存在になることを、必然化していると考えられる。

また、俊蔭女の尚侍としてのあり方は、『源氏物語』の尚侍、隼月夜にも踏襲されている点に触れておきたい。すでに山中和也氏は、尚侍となった俊蔭女が帝から熱烈な求愛を受けている点、隼月夜の尚侍像に影響を与えた可能性に言及している。<sup>(16)</sup>隼月夜も、俊蔭女と同様に、女官でありながら、他后妃を超えた立場にある様子が語られている点に注目したい。

御匣殿は、二月に尚侍になりたまひぬ。院の御思ひに、やがて尼になりたまへるかはりなりけり。やむごとなくもてなして、人柄もいとよくおはすれば、あまた参り集まりたまふ中にもすぐれて時めきたまふ。

隼月夜は、光源氏との関係がすでに露顕しているため、  
(賢木②一〇一頁)

正式な后になる途は閉ざされて<sup>(17)</sup>いる。にも拘わらず、尚侍となった臘月夜は、朱雀帝から他后妃にも優る寵愛を受けているのだという。俊蔭女が彈琴の功によって尚侍に就任しているのに対し、臘月夜は、桐壺院崩御に伴う前尚侍の辞任を補う形である点、就任の経緯は異なる。尚侍像を象る語彙表現に共通性がみられるわけでもない。しかし、女官でありながら、他后妃を圧倒する尚侍のあり方は、俊蔭女に通じる一面があるといえる。女君が、帝以外の男性とすでに関係を持っていながらも、深い帝寵を受ける存在であり、尚侍就任に、正式な后の立場の代償としての側面がある点も、両作品は共通する。

複数の引用を介して描き出された俊蔭女の尚侍像は、『源氏物語』の尚侍像にも影響を与えているのであった。

### おわりに

以上、俊蔭女の尚侍就任を実現させる物語展開の方法について、内侍のかみ巻に認められる複数の引用に注目して、検討を加えてきた。

内侍のかみ巻の物語は、王昭君説話の元帝、「長恨歌」の玄宗、『竹取物語』のかぐや姫の求婚者と、先行する男性像を次々と朱雀帝に重ね合わせてゆくことで、俊蔭女に対す

る寵愛の重さを表現し得ている。尚侍となった俊蔭女は、帝から后として扱われ、他后にも優る手厚い待遇でもてなされている。尚侍就任前後の重層的な引用は、朱雀帝の寵愛深さを表わすことで、俊蔭女が、女官でありながら他后を超えた存在になることを必然化していた。

内侍のかみ巻の引用方法は、『源氏物語』より未熟なものと評価されてもいるが、作中の物語展開に即せば、俊蔭女の尚侍としての造型を実現させる意義が認められる。そして、その尚侍像は、『源氏物語』の尚侍像にも影響を与えてゆくのであった。

※資料の出典は以下のとおりである。『うつほ物語』は『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう）、『西京雜記』は『四部叢刊』（商務印書館）、『文華秀麗集』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『経国集』は『日本文学大系』（国民図書株式会社）、『白氏文集』は、『新釈漢文大系』（明治書院）、『源氏物語』は、『新編日本古典文学全集』（小学館）、和歌は『新編国歌大観』に、『禁秘抄』は『群書類従』に拠る。和歌の引用のみ、私に表記を改めた箇所がある。

【注】

(1) 高橋亨氏「長編物語の構成力——宇津保物語「初秋」の位相」

『物語と絵の遠近法』ぺりかん社、一九九一年、初出一九八七年。大井田晴彦氏も「俊蔭の遺言を特殊なかたちで実現したもの」とする(『うつほ物語』の転換点——「内侍督」の親和力)、『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年、初出一九九九年。

(2) 猪川優子氏「うつほ物語」俊蔭女の〈尚侍物語〉——仲忠

への女一宮降嫁からいぬ宮入内へ——(『国語と国文学』第八十巻第六号、東京大学国語国文学会、二〇〇三年七月)。

なお、尚侍となった俊蔭女と朱雀帝の関係性については、松野彩氏の論もある。本来問題とならない兼雅の存在を障害とみなす等、心に禁制を設けることで、朱雀帝が俊蔭女との関係を精神的なものに留めていることを指摘している(「まかなひの女御」の虚構性——「内侍のかみ」巻の恋愛模様——)、『うつほ物語と平安貴族生活——史実と虚構の織りなす世界——』新典社、二〇一五年、初出二〇〇五年)。

(3) 王昭君説話については、後掲の上原作和氏・岡崎真紀子氏の論考のほか、近藤春雄氏「王昭君と国文学」(『日本漢文学大事典』明治書院、一九八五年)など参照。

(4) 上原作和氏「琴曲「胡笳」と王昭君説話の複次的統合の方

法について——『うつほ物語』比較文学論断章(1)——」(『光源氏物語の思想的変貌——〈琴〉のゆくへ』有精堂、一九九四年、初出一九九〇年)。

(5) 岡崎真紀子氏「王昭君」の平安朝文学史」(『やまとことは表現編—源俊賴へ—笠間書院、二〇〇八年、初出一九九五年)。このほか、画工に賄賂を贈らなかつた王昭君について、『西京雜記』では、醜く描かれたとするのに対し、『うつほ物語』では、美しく描かれたとする点に注目している。

(6) 注4上原作和氏は、「俊蔭」巻以来の伝統的な聖数を以て「改めたもの」と指摘しており、首肯される。俊蔭巻では、俊蔭が秘琴を習う仙人について、「七つの山に七つの人」(俊蔭、一五頁)などと語られている。話型的な発想を踏まえたものと捉えつつ、説話内の展開との関わりにも注目したい。

(7) 注4上原作和氏は、「直截的」撰取する伝承の登場人物を『物語』の主要人物に擬定することが主」とし、注5岡崎真紀子氏も、「物語の本筋を生むための発想の下敷きとして取り込んだわけではない」「文体の上でも、漢文に近接している」とする。

(8) 「長恨歌」の受容については、遠藤実夫氏「長恨歌が日本文学に及ぼした影響」(『長恨歌研究』建設社、一九三四年)、近藤春雄氏「我が国における長恨歌」(『長恨歌・琵琶行の

研究』明治書院、一九八一年）、新聞一美氏「白居易の長恨歌——日本における受容に関連して——」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年、初出一九九三年）など参照。

(9) 江戸英雄氏「桐壺帝の物語へ——『うつほ物語』の「長恨歌」引用から」（『うつほ物語の表現形成と享受』勉誠出版、二〇〇八年、初出二〇〇五年）。国譲下巻では、あて宮腹皇子の立坊を阻止しようとする後の宮の発話に「王昭君を胡の国へ遣り給へる、楊貴妃を殺させ給へる帝、なくやはありける」（『国譲下、七五〇頁』）とある。

(10) 注8新聞論文。

(11) 山田彩起子氏「平安中期以降の尚侍をめぐる考察」（『古代文化』第六四卷第二号、古代学協会、二〇一二年九月）に指摘がある。『貞信公記』延喜七年（九〇七）二月八日条によれば、尚侍就任後、梨壺に居住している。『河海抄』（初音巻）所引『醍醐天皇御記』延喜十三年（九一三）正月十四日の踏歌の記事では、藤壺に居所を移していることが伺える。

(12) 三上満氏「宇津保物語・初秋巻の方法」（『中古文学論攷』第五号、早稲田大学大学院中古文文学研究会、一九八四年）。俊蔭女と『竹取物語』との関係については、ほかに須見明代氏「『宇津保物語』における俊蔭女」（『日本文学』第三十

九号、東京女子大学日本文学研究会、一九七三年三月）、網谷厚子氏「物語における『竹取』取り——『うつほ物語』の現世の異郷について——」（『物語研究会編『物語——その転生と再生——新 物語研究 2』有精堂、一九九四年）など。

(13) 加納重文氏「尚侍」（『平安文学の環境——後宮・俗信・地理——』和泉書院、二〇〇八年）。論中において、史実上「第一期」とされる尚侍。俊蔭女について、「外戚 勢力の反映としての任官」でない点、「壮年の既婚婦人」である点にも注目する。

(14) 「日給簡」（『国史大辞典』吉川弘文館、杉本一樹氏執筆担当）参照。

(15) 和歌の唱和がおこなわれるなか、左大臣源季明・右大臣藤原忠雅・大納言源正頼・大納言藤原兼雅・中納言藤原正仲・中納言正明・中納言源文正が署名する。「左大臣従二位源朝臣季明」（内侍のかみ、四三〇頁）など、それぞれに官位姓名を記している。

(16) 山中和也氏「臘月夜の尚侍就任による今上妃との兼帯について——賢木巻断章の新視座として——」（『詞林』第三号、大阪大学古代中世文学研究会、一九八八年）。俊蔭女の物語の「筋立ては〔稿者注、源氏物語の〕作者にヒントを与えたかも知れない」とする。



(17)

賢木巻において、右大臣は、「かく本意のごとく奉りながら、なほその憚りありて、うけばりたる女御なども言はせはべらぬをだに飽かず口惜しう思ひたまふるに」(賢木②一四七頁)と、尚侍となつた朧月夜は、女御とは異なる立場にあると述べている。弘徽殿太后も、「またこの君をも宮仕にと心ざしてはべりしに〔略〕その本意違ふさまにてこそは、

かくてもさぶらひたまふめれど」(賢木②一四八頁)と、朧月夜の尚侍出仕は、本来目指していた正式な后妃としての入内とは相違すると捉えている。

〔付記〕本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費(DC2)による研究成果の一部である。